



今日話題

「今の日本で公人として機会あるごと  
にいちばんはつきり  
と『平和』と『反戦』  
への決意を語ってい  
るのは、皇室の人々なのではない  
か、と思います」

国際基督教大学の森本あんり教  
授がキリスト教雑誌「信徒の友」  
十月号の連載エッセーでそう書い  
ている。思い切った見方だと感  
じる一方、  
なるほどと  
も思う。

## 平和のシンボル

が絶対平和主義のクエーカー信徒

注目すべき点として、教授は今  
の天皇が即位以来一度も靖国神社  
に参拝されていないことをあげ、  
おそらく今後参拝はないのでは  
ないかと予測する。

昨年の園遊会では君が代と日  
の丸は「強制でない方が望ましい」  
との趣旨の発言をしたこと、今年  
六月のサイパン島戦没者追悼では  
韓国人慰霊塔にも立ち寄ったこと  
などにも触れている。

首相や都知事の言動が内外で反  
発を買っている間に、皇室が平和  
と民主主義を守る「大事なこと」で  
なっていると見る。

文章の発表後、教授のもとには  
研究者仲間から同意する意見とと  
もに疑問の声も寄せられたそう  
だ。天皇の政治的な行動を制限す  
る憲法との関係からの疑問もあり  
うるだろう。

しかし、家庭教師の米国人女性  
だ。天皇とカトリックの家庭で  
育った皇后、それに海外経験豊か  
な皇太子夫妻らによる現在の皇室  
には、「戦後民主主義の思いがけ  
ない結果がありそうです」という  
見方には説得力がある。

天皇制を語ることにあまり気が  
進まない、と率直に告白して始ま  
る教授のこのエッセーの見出しは  
「平和のシンボルとなった天皇」  
である。

(嶋田 健)